表現の流れ』平5・岩波書店、二三六頁）、阪倉篤義氏注13文献など。

（9）接続助詞「つつ」内で係結が流れた例は、他の作品に存することが報告されている（仁田義雄氏注3文献には『浜松中納言物語』の例が示されている）。

（10）前稿（小田勝「出現位置からみた係助詞『ぞ』」『国語学』一五九集、平1）に示した数値と異なるのは、右の前稿の数値には、前稿に注記してある通り、係結の不成立・不整合などの例数を含んでいるためである。係結の不成立とは次のような例をいう。

・［源氏詞］「今はまろぞ思ふべき人。なうとみ給ひそ」（若紫・①二二二―3）

また、係結の不整合とは次のような例をいう。

・われはと思ひあがれる中将の君ぞ、「……」など聞ゆ。（初音・③二―4）

（11）テキスト中、「ぞ」の流れをもつ文（主文）の文末に存しない型は、「命令文」「体言止」「文末なし（省略）」の三種である。「連体形止」については、本稿では本文用例2のようなものを除外していることに注意。本稿の筆者は、注6ⓑに述べた理由、及び「ぞ」の流れをもつ文（主文）の文末に体言止めがないことから、本文用例2の文末が余情（強意）の連体形止めであるとは考えていない（第一節で言及した筆者の別稿参照）。

「ぞ」の流れをもつ文（主文）の文末に「命令文」が起きないということは、モデル的にいえば、

・雨こそ降れど行け。

という言い方はあり得るが、

・雨ぞ降れど行け。

という言い方はあり得ない、ということである。これが本質的なことなのか、それともたまたまテキストにみえないだけなのかは、今のところわからない。

（12）例えば近藤泰弘氏「構文上より見た係助詞「なむ」―「なむ」と「ぞ―や」との比較」『国語と国文学』昭54・12月号など。

（13）「文全体の基調」とは、「「なむ」の係り結びを含む文は、全体として聞き手に対して「おし出して確にことわる」という気持ちを示す」（阪倉篤義氏「歌物語の文章―「なむ」の係り結びをめぐって―」『国語国文』昭28・6月号、『文章と表現』（昭50・角川書店）所収、三三頁、傍点原文）のような、文全体にある語気を添えるものとして考えている。

（14）私見ではテキスト中8例。「ぞ」については「ぞ―なむ―連体形」が1例あるのみ（⑥二九一―3、ただし「ぞ」は「て」内で流れたとも考えられる）、「こそ」については「こそ―なむ―連体形」と考えることもできる例が1例（⑥一八五―10）、「こそ―こそ―已然形」が1例（③三六六―5）みられるだけである。

（15）本稿の筆者は注10文献において、係助詞「ぞ」の卓立の範囲が直前成分だけではなく、「成分＋述語」であると述べたが、そのこと（卓立の範囲）は今は措く。

（補注）第一節で言及した「別稿」は『国学院雑誌』平10・1月号に掲載される。併せてご参照賜れば幸いである（校正時付記）。

注

(1) 例えば、宮坂和江氏「係結の表現価値　―物語文章論より見たる―」『国語と国文学』昭27・2月号など。

(2) 中村幸弘氏「係結の構文論的取り扱い」『文教大国文』10号、昭56（『補助用言に関する研究』平7・右文書院、所収）

(3) 仁田義雄氏は、流れの起こる場所として、本稿にいう①連体修飾語、②連用中止、③接続句の三種をあげておられるが（「係結びについて」『研究資料日本文法⑤助辞編（一）助詞』昭59・明治書院、一二二～一二六頁）、網羅的ではない。係結の流れを扱った論考としては他に森野宗明氏「弘徽殿の大后の造形と言動描写」（『王朝貴族社会の女性と言語』昭50・有精堂、第一部第一章）が管見に入った。

(4) 吉沢義則氏校注『対校源氏物語新釈』（昭27・平凡社）による。和歌は対象外とした。また「こそ」には「こそは」（三二〇例）を含まない。同書では河内本との対校を示すために不自然な仮名書き等が生じているが、それを漢字に改めるなど、引用に当たり表記を一部改めたところがある。

(5) 角括弧内に示した句点は、そこで文が終止することを示す。この場合、断定辞で文が終止する、つまり断定辞が文末にあることを示す。

(6) 他に次のようなものを除外した。

ⓐ二重の係り（二つの係助詞が一つの述語に係る）　本文用例21参照。

ⓑ本文用例2のような例。

・人の心皆さのみこそある世なめれ。（常夏・③八二―1）

・思はずにこそなりにける御心なれ。（若菜上・③三三五―1）

・命こそ定めなき世なれ。（夕霧・④二八三―3）

・さきの世こそゆかしき御有様なれ。（東屋・⑥三六―7）

のような例に照らしても、用例2は、「うたてぞ」が「なりぬべき」で一旦流れ、主文の文末がそれとは別にたまたま余情（強意）の連体形止めである、とは考えにくい。第一節で言及した筆者の別稿参照。

ⓒ本文存疑

例「物まゐりなどし給ふにぞなかなか面痩せもてゆき。」（手習・⑥二四八―8）『源氏物語大成校異篇』所収のすべての本が「ゆく」（または「いく」「行」）となっている。

ⓓ構文把握困難・解釈不明

例「隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女房、白き衣のいひ知らずすすけたるに、きたなげなるしびら引きゆひつけたる腰つき、かたくなしげなり。」（末摘花・①二五四―13）

ⓔ解釈（句読）はテキストによるのを原則とした。例えば「清げなる大人二人ばかり、さてはわらはべぞ出で入りあそぶなかに、……」（若紫・①一七六―4）は「出で入りあそぶ」で句点とするのがふつうである（その場合通常の係結となる）が、テキストに従って「流れ（連体修飾内）」とした。ただし、②三九〇―7、④一二七―13、④四〇〇―12の3例に限り、テキストの句読点に従わず、その係助詞で文末（つまり係助詞の終助詞用法）とみた。テキストの句読点では、「流れた箇所」の特定ができないからである。

(7) ほかに「なむ」の結びが「～ままに」の部分で流れた例があるが（1例、⑤二三七―10）、これは「連体修飾内での流れ」と考えた。また同じく「なむ」の結びが「～ものから」内で流れたかと思われる例が1例みられるが（②二〇一―3）、これは「思ふ折々」の「思ふ」の部分で流れたとも考えられるため、「流れた箇所の確定困難な例」（第一節用例4参照）として除外した。

(8) 「相手に説明するという態度を強く示す」（阪倉篤義氏『日本語

「ぞ」の流れの文が「ぞ」の係結で終わる率　13・9％
「こそ」の流れの文が「こそ」の係結で終わる率　14・1％
「なむ」の流れの文が「なむ」の係結で終わる率　31・1％

のようであり、「なむ」が際立って高率であることが注目される。「なむ」はそもそも「流れ」の率自体が最も高いのであり（15・5％、表2参照）、これらの現象は、「なむ」が一成分の卓立ということよりも、いわば「「なむ」の基調」といった文全体の基調（表現価）として働いているのではないか[13]ということを示唆しているように思われる。

20　聊か宣ひおくことなむ侍りしを、聞召すべき故なむ一こと侍れど、かばかり聞え出で侍るに、残りをと思召す御心侍らば、のどかになむ聞召し果て侍るべき。
（橋姫・⑤二七―10）

のような例が「なむ」の用法の一つの型を示しているのではないだろうか。また、

21　この木のもとになむ、時々あやしきわざなむし侍る。
（手習・⑥二三五―3）

のような「二重の係り」（二つの係助詞が一つの述語に係る）という現象も、「なむ」に多くみられる現象である[14]。

Ⅲについて。このことは「ぞ」の流れをもつ文が一般に平叙文であるということを意味し、Ⅰとも関連して、この現象は「ぞ」の基本的な働きが「卓立」にある[15]ということを示唆しているように思われる。

以上みてきたような、「流れ」の起きる率、「流れ」の起きる場所（構文的位置）の傾向、及び「流れ」の「後処理」（主文の文末）のあり様の傾向は、各係助詞の特徴を色濃く反映しているように思われる。

表1～3を総合して、

「ぞ」は卓立
「こそ」は対比的強調
「なむ」は文全体の基調（表現価）

に関係するという傾向がみられるように思われる。

六　結論

本稿は、源氏物語を資料として、係結の流れを調査し、

一、流れは「なむ」が最も多いこと
二、接続句内の流れは、「こそ」は逆接で、「なむ」は順接で流れることが多いこと
三、「なむ」は流れた後で再度「なむ」の係結によって結ばれる文が多いのに対し、「ぞ」は一文中に一度しか使われないことが多いこと

などをみた。右のような「流れ」の実態は、各係助詞の特徴を色濃く反映していると考えられ、右のことから、

「ぞ」は卓立
「こそ」は対比的強調
「なむ」は文全体の基調（表現価）

に関係するという傾向が指摘される。

文が「なむ」の係結で閉じているなら、つまり、

18　―なむ　―（流れ）　―なむ　―連体形（結び）。

のような形をとっているなら、それは文全体が表現価として「なむ」の基調をもっていると考えることができるであろうが、一体18のような構文は普通にみられるだろうか。それともあり得ない構造なのだろうか。係結の流れのいわば「後処理」はどのようになされるのだろうか。

〈表3〉は、係結の流れをもつ文の文末（主文の文末）がどのように閉じられているかを一覧にしたものである。

〈表3〉

	ぞ	こそ	なむ
平叙文	74	25	64
疑問文・反語文	5	2	15
命令文		2	11
終助詞で終わる文	3	8	16
体言止・連体形止		3	1
文末なし（省略）		7	11
「ぞ」の係結	14	5	4
「こそ」の係結	1	10（1）	9（1）
「なむ」の係結	4	9（3）	59（12）

表の「平叙文」とは前節用例5a～c、6、7a～cのようなものである。「疑問文・反語文」は同じく16c、17c、「体言止・連体形止」は8b、11b、「文末なし」は14のようなものである。「なむ」に対して「なむの係結」となっている部分（表中56例となっている部分）は右18のような構文の用例数である（実例は用例20参照）。同様に「ぞ」に対して「なむの係結」となっている部分（表中4例となっている部分）は前節用例11aのようなものである。カッコ内の数字は、

19　いと荒き山越えになむ　侍れど、殊に程遠くはさぶらはずなむ。（浮舟・⑥八九―14）

のような所謂係助詞の「述語の省略」で終わっている文の例数（内数）である。係助詞の述語の省略に限り「文末なし」に含めずそれぞれの係結に含めた。

この表から次の諸点が指摘される。

Ⅰ　係助詞の流れをもつ文の文末（主文の文末）は通常の終止をとることが最も多い。

Ⅱ　通常の終止に次いで、流れた係助詞と同じ係結で結ぶことが多い。

Ⅲ　「こそ」「なむ」の流れをもつ文（主文）には種々のタイプがあるが、「ぞ」のそれはタイプが非常に限られている。[11]

Ⅰについて。係助詞がいわれるように「卓立」であるとするなら、一文中に卓立の箇所は一箇所であるのが最も自然であり、Ⅰは納得できる現象である。一方、Ⅱの現象はそのことと矛盾する現象であるが、この、一度流れた係結が同じ係助詞によって再度なされるという現象の起こる率は、[12]

衣着て大刀佩きたるあり。（東屋・⑥二六―9）

b　たどらむ人（＝察シノヨイ人）は心得つべけれど、［軒端荻ハ］まだいと若き心地に、さこそ　さし過ぎたるやうなれど（＝アンナニ出シャバリノヨウダガ）［事情ヲ］えしも思ひわかず。（空蟬・①一〇一―12）

c　女房なむ［紀伊守方ニ］まかり移れる頃にて、せばき所に侍れば、なめげなる事や侍らむ。（帚木・①七一―11）

従来、注意されていないようだが、準体言中で流れた例がみられる。

17 a　少納言の乳母とぞ人いふめるは、この子の後見なるべし。（若紫・①一七七―2）

b　なほこの近き夢（＝大君逝去ノ事）こそ、さますべき方なく思ひ給へらるるは、［源氏ノ薨去ト］同じごと世の常なき悲しびなれど、罪深きかたは［大君ガ］まさりて侍るにやと、それさへなむ心憂く侍る。（宿木・⑤二三八―8）

c　［コノ唐猫ハ］心なむまだ［人ニ］なつきがたきは、見慣れぬ人を知る（＝人見知リヲスル）にやあらむ。（若菜下・④五―2）

四　源氏物語における係結の流れ

源氏物語において「ぞ」「こそ」「なむ」に対する結びの流れの用例数を、流れた場所（構文的位置）別に示すと〈表2〉のようになる。[10]

〈表2〉

	ぞ	こそ	なむ
接続句	八三	六〇	一六一
連用中止	五	二	三
連用修飾			二
連体修飾	三	八	一七
準体言	一〇	一	六
流れ合計	一〇一	七一	一九〇
全用例数	一一五三	一三三七	一二二二
流れ率％	八・八	五・三	一五・五

表中の「全用例数」は係助詞全用例数から和歌部分と文末用法の用例数を引いた数である。この表をみると、流れを起こすことの最も多いのは「なむ」であり、率にして「こそ」の三倍となっていることがわかる。

五　係結の流れとそれを含む主文の終わり方

一体係助詞の機能は、文末の終止のあり方を規定（拘束）することにある。係結の「流れ」とはその係助詞の機能からすれば矛盾するともいい得る現象なのであって、この現象はどう考えたらよいであろうか。係助詞「ぞ」の結びが流れた文の、また「こそ」の、「なむ」の結びが流れた文の、その文末（つまり主文の文末）は、どのようなありようで閉じているのだろうか。「なむ」に対する流れをもつ

接続助詞「を」「に」「ながら」は、順接・逆接両方の用法があるので、これを別枠とした。この表から、係助詞「ぞ」の流れは順接内と逆接内とでほぼ同数であるのに対し、「こそ」の流れは圧倒的に逆接内に偏っており、「なむ」の流れは逆に順接内が多いことがわかる。「を」「に」「ながら」を除外して、

係助詞「ぞ」の流れ：　順接（28例）　≒逆接（29例）
係助詞「こそ」の流れ：順接（10例）　＜逆接（42例）
係助詞「なむ」の流れ：順接（41例）　＞逆接（25例）

のようである。これは、「こそ」が対比的な文脈で使われることが多く、「なむ」が相手への説得の場で使われることが多い[8]という従来示されている論を、「流れ」という「成立しない係結」の側からも裏づける結果になっている。なお、この表から、未然形接続の「ば」中で流れた例が存しないことが注意される[9]。

三　接続句以外での流れ

接続句以外で係結が流れる場合の結びの構文的位置には、第一節B～Eにあげた四つの場合がある。まず、中止法に立つ連用形で流れた例（用例数は第四節にあげる。以下同じ）。

13 a　［故八宮ノ］おはしましし方あけさせ給へれば、塵いたう積りて、仏（＝仏像）のみぞ、花の飾り衰へず、［八宮ガ生前］行ひ給ひけりと見ゆる御床など取りやりて、掻払ひたり。（椎本・⑤八一―9）

b　［花散里ヘノ］かばかりの対面も又はえしもやと思ふこそ、事なしにて過ぐしつる年頃もくやしう、来し方行く先のためしになりぬべき［冤罪ノ］身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ。（須磨・②一四―6）

c　……、生きての世に、人よりおとして［私（＝物怪）ヲ］おぼし捨てし［恨ミ］よりも、［紫上トノ］思ふどちの御物語のついでに、快からず憎かりし［私ノ］有様を、宣ひでたりしなむいと恨めしく、今は只［私ヲ］亡きにおぼし許して、ことびとのいひおとしめむをだに、省き隠し給へとこそ思へと、うち思ひしばかりに、斯くいみじき身のけはひ（＝紫上ニ取リツイタ物怪ノ身柄）なれば、斯く所せきなり。（若菜下・④七七―6）

連用修飾語中で流れた例は、「なむ」の結びに2例だけみられる。

14　これ（＝コノ笛）になむ誠に旧きことも伝はるべく聞きおき侍りしを、斯かる蓬生に埋もるるも哀れに見給ふるを。（横笛・④一八一―4）

15　それ（＝母ノ存否）ばかりなむ心に離れず悲しき折々侍るに、……（夢浮橋・⑥三二七―10）

次に、連体修飾語中で流れた例。

16 a　今朝より［二条院ニ］参りてさぶらひの方にやすらひける人々、今ぞまゐりて物など聞ゆるなかに、清げだちてなでふ事なき人のすさまじき顔したる、直

過ぐしくるを、いとありがたき［八宮ノ］御有様を承り伝へしより、斯く心にかけてなむ［八宮ヲ仏道ノ師トシテ］頼み聞えさする。（橋姫・⑤一三―4）

次に、順接の接続句中で流れた例をあげる。源氏物語中には已然形接続の接続助詞「ば」（以下「已ば」）内、「て」内、「で」内（「ぞ」の結びのみ）で流れた例がみられる。

10 a　御子二所おはするを、［明石女御ハ］又も気色ばみ給ひて、五月ばかりにぞ　なり給へれば、神事などにことつけて［六条院ニ］おはしますなりけり。（若菜下・④二七―6）

b　とある事もかかる事も、前の世の報いにこそ　侍るなれば、いひもてゆけば、只みづからの怠りになむ侍る。（須磨・②五―3）

c　はかなき親に賢き子のまさるためしは、いと難きことになむ　侍れば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむ程の行く先、いとうしろめたきによりなむ、［夕霧ニ学問ヲ］思う給へおきて侍る。（少女・②二九九―10）

11 a　斯くてその月二十日あまりの程にぞ、藤壺の宮の御裳着のことありて、又の日なむ大将（＝薫）参り給ひける。（宿木・⑤三〇八―14）

b　「しか、［浮舟ハ］ここにとまりてなむ。心地あしとこそ　物し給ひて、忌む事受け奉らむと宣ひつる」と［僧都ノ母尼ハ］語る。（手習・⑥二八〇―13）

c　［源氏ガ夕顔ヲ］世に忘れがたく悲しき事になむ　おぼして、「……」と、そのかみより宣ふなり。（玉鬘・②三八三―9）

12　［朱雀院ハ］姫宮（＝女三宮）の御事をのみぞ　なほえおぼし放たで、この院（＝源氏）をば、なほ大方の御後見に思ひ聞え給ひて、［女三宮ニ対シ］うちうちの御心寄せあるべく奏せさせ給ふ。（若菜下・④二二―4）

二・二　接続句中での流れの用例数

源氏物語において、接続句中で結びが流れた例は以上のようであるが、[7]その用例数をまとめて示すと〈表1〉のようである。

〈表1〉

	逆接					順接		
	～ど	～とも	～を	～に	～ながら	～已ば	～て	～で
ぞ	29		19	7		15	12	1
	29		26			28		
こそ	39	3	7	1		8	2	
	42		8			10		
なむ	25		87	8	1	32	9	
	25		96			41		

二・一　接続句中での流れの用例

まず、結びが接続句中で流れた例をあげる。逆接では、源氏物語中、接続助詞「ど」内で流れた例と、「とも」内で流れた例（「こそ」の結びのみ）とがみられる（用例数は第二・二節にまとめて示す。以下同じ）。

5 a　別納のかたにぞ、曹司などして人住むべかめれど、こなた（＝西ノ対）は離れたり。（夕顔・①一三二―8）

b　［乳母ハ］心のうちにこそ［上洛ヲ］いそぎ思へど、京の事は、いや遠ざかるやうに隔たりゆく。（玉鬘・②三六一―6）

c　さなむ　思ひ侍れど、かしこもいと物さわがしく侍り。（浮舟・⑥一三六―12）

6　守こそ［浮舟ヲ］おろかに思ひなすとも、我（＝浮舟ノ母）は命をも譲りてかしづきてむ。（東屋・⑥四―3）

次に、接続助詞「を」「に」内で流れた例をあげる。

7 a　かく人（＝浮舟）の物し給へばとて、通ふ道の障子一間ばかりぞ　あけたるを、右近とて、大輔がむすめのさぶらふ来て、格子おろしてここに寄り来なり。（東屋・⑥四二―12）

b　源氏のおとども、いと口惜しう、よろづの事押し譲り聞えてこそいとまもありつるを、心細く事繁くもおぼされて、歎きおはす。（薄雲・②二四五―7）

c　［大内記ハ］世のひがものにて、ざえの程よりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむ　ありけるを、［源氏ガ］御覧じ得るところありて、斯く取りわき召寄せたるなりけり。（少女・②三〇六―10）

8 a　……、［豊後介ハ］心をさなくも顧みせで出でにけるかな、と、すこし心のどまりてぞあさましき事（＝妻子ヲ捨テテ来タコト）を思ひつづくるに、心弱くうち泣かれぬ。（玉鬘・②三七〇―4）

b　［太宰少弐ノ］娘どもも泣きまどひて、［［玉鬘ノ］母君のかひなくてさすらへ給ひて行方をだに知らぬかはりに、［玉鬘ヲ］人なみなみにて見奉らむとこそ　思ふに、さるもの（＝監ノヨウナ田舎者）のなかにまじり給ひなむこと」と思ひ歎くをも［監ハ］知らで……（玉鬘・②三六四―7）

c　「……」となむ［源氏ハ］常にうちうちのすさびごとにもおぼし宣はするに、げにおのれら（＝左中弁）が［源氏ヲ］見奉るにも、さなむおはします。（若菜上・③二八五―11）

「なむ」の結びが接続助詞「ながら」内で流れた例が1例みられる。

9　［薫ハ］法文などの心、得まほしき志なむいはけなかりし齢より深く思ひながら、えさらず世にあり経る程、おほやけ私にいとまなく明け暮し、わざと閉ぢこもりて［経文ヲ］習ひ読み、大方はかばかしくもあらぬ身にしも、世の中を背きがほならむも、憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみ、紛らはしくてなむ

詞を伴う成分が意味上連体修飾語にだけ係る場合。

乙二　一続きの事態を表す［用言α＋て＋用言β。］の句型で、係助詞を伴う成分が意味上その上部（用言α）にのみ係ると判断される場合。

2　［源氏八］わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、［美点ヲ］すべていひつづけば事事しう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。（桐壺・①二一―3）

2は乙一のタイプの例であるが、傍線部「うたてぞ」は、意味的には「なりぬべき」に係るにもかかわらず、文末は「ぞ」に対する曲調終止（連体形）で結ばれている。

このような現象は、一見、誤用と説明されるだろうが、本稿の筆者は別稿、

「係助詞に対する過剰な結びについて」（補注）

において、右例2のような場合、理論上の正用法である、結びの流れた例（つまり「うたてぞなりぬべき人の御さまなりけり。」）がみられないこと、従って右例2の如きは文末が連体形で結ばれるのが常態であることを論証した。

右の甲乙以外の場合、即ち係助詞を伴う成分が文末に係らず、かつ乙一、乙二の構文ではない場合、係結は行われず、結びは所謂「流れ」を起こすことになる。源氏物語において、係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」に対する結びがどのような箇所（構文的位置）で流れるかを整理して示すと、次のようである。

A　接続句中
B　中止法に立つ連用形中
C　連用修飾語中
D　連体修飾語中
E　準体言中

なお、「流れ」の文節の認定は、人によって若干のゆれがあると思われる。例えば次例では、

3　君（＝紫上）は、男君（＝源氏）のおはせずなどして、さうざうしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひ聞え給ひて、うち泣きなどし給へど、宮（＝父）をば殊に思ひいで聞え給はず。（若紫・①二八―9）

「ぞ」の結びは、「聞え給ひて」ではなく「し給へど」で流れたと判定した。また、「流れ」の箇所を一文節に確定できない例（私見では全部で8例）は、これを除外した。[6] 例えば、

4　今日ぞ冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて空の気色いとあはれなり。（夕顔・①一六六―11）

のようなもので、「今日ぞ」の流れる場所として、「日なりける」（準体言内）、「しるく」（連用中止）、「うちしぐれて」（接続句内）のいずれも考えられる。

以下、節を改めて、右の「A　接続句中」の用例から順次みてゆくことにする。

二　接続句中での流れ

係結の流れをめぐって

―源氏物語を資料として―

小田　勝

On the Kakarimusubi

―Unrealization of Musubi―

Masaru Oda

要旨

本稿は、従来実態が調査されていない「係結の流れ」について正面から取り上げ、「成立しない係結」という裏側から係結についての考察を試みたものである。源氏物語の「係結の流れ」の調査から、次の諸点が指摘される。①流れは「なむ」が最も多い、②接続句内の流れは「こそ」は逆接で、「なむ」は順接で流れることが多い、③「なむ」は流れた後で再度「なむ」の係結によって結ばれる文が多いのに対し、「ぞ」は一文中に一度しか使われないことが多い。これらの実態は、各係助詞の特徴を色濃く反映していると考えられ、この点から、「ぞ」は卓立、「こそ」は対比的強調、「なむ」は文全体の基調に関係するという傾向が指摘される。

○　本稿の目的

「係結」は、古典語に特有の現象として、多くの関心を集め、統計的な調査も進んでいる。しかし「係結の流れ（消失・消滅・解消などともいう）」と呼ばれる現象については、従来あまり関心がもたれていないように思われる。係結の表現価値等の研究は、多く成立した係結について行われてきたようである。[1] 係結が成立する場合の文構造については中村幸弘氏が整理しておられるが、[2] どのような構文上の位置で係結が流れるかについての整理は未だなされていないように思われる。[3] 本稿は、源氏物語を資料として、係結の流れについて調査し、係結の流れという従来の研究とは異なる角度から、係結について考えようとするものである。

一　係結の流れ

一般に、係結が行われるのは、

甲　係助詞を伴う成分が文末に係る場合

に限られる。

1　月影ばかりぞ八重葎にもさはらずさし入りたる。

（源氏物語・桐壺・第①冊一〇頁6行）[4]

ただし、私見によれば、次の二つの場合には、係助詞を伴う成分が意味上文末に係らないにもかかわらず、係結は（流れずに）行われるようである。

乙一　［連体修飾語＋名詞＋断定辞。[5]］の句型で、係助